

「エイドス」(Εἶδος) と「影」

—影の見方に関する小考—

石 渡 利 康

Toshiyasu ISHIWATARI. “Εἶδος (Absolute reality)” and “Shadow”: The desirable way of looking at our own shadows. *Studies in International Relations* Vol. 34, No. 2. February 2014. pp. 77 – 85.

There are many sorts of shadows around us such as shadows made by light, shadows as our double, legendary man-eating shadows, shadows which become independent of their possessors, shadows regarded as the absolute reality which Platon showed in his “Allegory of Cave”, and psychological shadows presented by Carl Gustav Jung. This essay aims at seeking for the desirable way of looking at our shadows. The study is done on the basis on cross-disciplinary method.

1. 問題の所在

まぼろしの
影を慕いて 雨に日に
月にやるせぬ 我が想い
つつめば燃ゆる 胸の火に
身は焦がれつつ しのび泣く

わびしさよ
せめて傷心の なぐさめに
ギターをとりて 爪びけば
どこまで時雨 ゆく秋ぞ
トレモロ淋し 身は悲し

君故に
永き人生を 霜枯れて
永遠に春見ぬ 我がさだめ
永ろうべきか 空蟬の
儚き影か 我が恋よ

これは、古賀政男作詞・作曲『影を慕いて』（昭和7年）の全歌詞である⁽¹⁾。藤山一郎のもち歌であるが、古賀政男自身も歌っていて心にしみる。一世を風靡した名歌で、現在でも年配者に愛唱されている。

私は、ここで使われている「影」は恋人の「面

影」であると思っていた。しかし、調べてみると、本当は「失恋に形を借りた絶望感の表現、生活苦の歌である」と古賀政男自身が述べているという。この歌には恋人の表現はなく、「まぼろしの影」、第3番の「空蟬の儚き影」しか登場しないのは、そのためであるらしい⁽²⁾。

泉鏡花の『湯島の白梅』を歌った「知るや白梅玉垣に のこる二人の 影法師」の中の影法師のイメージには、情緒がある。

こうした歌詞を見ても分かるように、「影」という言葉と概念は、様々な関連で用いられる。光による投射の影もあれば、「影の薄い女性」といった抽象性を含んだものもあるし、精神分析分野でのシャドー（shadow）の意味でも使われる。

この小論は、こうした多義性をもつ「影」の諸問題に若干の考察を試みようとするものである。考察の目的は、「影」を理解することによって、自分自身の人間理解の幅を少しでも広げることである。考察方法は、クロスディシプリナリーである。

2. 「影」の諸種

影には、様々な様相がある。次に、完全に網羅的ではなく、部分的に重複するかもしれないが、思いつくままに「影」がもつ幾つかの諸相を挙げてみよう。列挙する順序は、論理的連結とは一応

無関係である。

第1は、光源体である太陽や光によって作られる通常の影で、それ自体は特に意味をもたないものである。しかし、民俗学的あるいは伝説的ないしは心理学的観点からある意味が付されると、特別な様相を示すようになる。これは、「光と影」の対比の問題である。

第2は、非存在の影である。リヒャルト・シュトラウス（Richard Strauss, 1864-1949）のオペラ『影のない女』（Die Frau ohne Schatten）が、その一例である。非存在の影とは、論理的に不合理な感じがするが、このオペラを見れば不思議でも何でもないことが分かる。

第3は、人間から分離・独立する影である。ハンス・クリスチアン・アナセン（Hans Christian Andersen）の『影法師』（原題 *Skyggen* 『影』）、アデルベルト・フォン・シャミッソ（Adelbert von Chamisso）の『影をなくした男』（原題 *Peter Schlemihles wundersame Geschichte* 『ペーテル・シュレミールの不思議な物語』）が、それを描いている。

第4は、生命の存在と深く関係している影である。池の水面に影を映すと水に吸い込まれる、という「影取りの池」の伝説、影を踏まれると死が真近であるという言い伝えなどに見られる影などその数は結構多い。

第5は、実体だと思われている影である。プラトン著『国家』（*Πολιτεία*）の「洞窟のアレゴリー」に出てくる影である。プラトンによれば、私たちが現実に見ているのはエイドス（*εἶδος*）の影にすぎないのである。

第6は、現身（うつせみ）の「分身」（ダブル）としての影である⁽³⁾。

第7は、カール・グスタヴ・ユング（Carl Gustav Jung）がいう「無意識の全体」としての影であり、精神分析の分野に深く関わってくる⁽⁴⁾。

このように、ざっと雑学的に拾い挙げただけでも、「影」は芸術、建築、習俗などの外的象徴と、分身などの内的象徴に分けることもできる様々な現象に関係する問題であり、マルチディシプリン、クロスディシプリンな研究対象となり得ることが明白である。

3. プラトンの「洞窟のアレゴリー（*ἀλληγορία*）」

影とは何かという問題に関して、真っ先に頭に浮かぶのは、プラトン（*Πλάτων*）の『国家』（*Πολιτεία*）第7巻に書かれている「洞窟のアレゴリー」である⁽⁵⁾。「洞窟の比喩」とか「プラトンの洞窟」ともいわれている。あまりにも有名なアレゴリーで、次のような内容である。

生れてこのかた洞窟の中に閉じ込められていて、洞窟の奥だけを見て育った人間は、背後の洞窟の入り口からの光によって照らされてできた影を見て、それを「実体」と思い込んでしまう。プラトンは、この比喩で何を言おうとしたのだろうか。

私たちは、現実に目にしているものを「実体」と考えているが、実はそれは真の実体としての「エイドス」（*εἶδος*, 形相）すなわち「イデア」（*ἰδέα*）の影にすぎない、とプラトンはいったのである⁽⁶⁾。

この原稿を書いている現在、『偽りの人生』（原題 *Todos tenemos un plan* 『全ては計画をもつ』）という映画が上映されている。アナ・ピターバーグ監督、ヴィッゴ・モーテンセン主演の話題作である。

主人公は、ブエノス・アイレスに住む、双子の弟の医者である。経済的には豊かだが、心は常に空虚である。突然やってきた末期ガンで苦しむ兄を依頼によって殺す。主人公の医師は、兄になり代わって生れ故郷に帰り、そこで偽りの人生を生きることになる。しかし、彼はそこで愛のある生活をおくるうちに、それまでの人生こそ偽りだったことに気付くようになるのである。どういう訳か、「洞窟のアレゴリー」と重なり合うところがあるような気がする。

プラトンは、「洞窟のアレゴリー」を通して、いつの時代においても実体の何であるかを考えさせ、思考の深まりを私たちに求め続けている。その意味で、古代ギリシャの思索は、2千数百年後の現代とも密接に繋がっているのである。

4. 生命を奪う影と美的感覚を生む影

影は、なぜか不気味である。影は光とコンパインされ「光と影」となり、両者のコントラストは対立概念をもたらす。光源体によってできる影は、光源体の位置や強弱によって変化する。この変化を利用して、建築などの分野では、影は美的感覚を醸し出す重要な要素となる。

影の不気味さは、影取りの池の伝説は各地に見受けられる⁽⁷⁾。神奈川県藤沢市にある「影取りの池」には、「おはん」という名前の大蛇が住んでいて水面に映った人の影を食べたという。影を食べられた人は、やがて死を迎える。

東京都町田市の影取りの池は、武将の小山田高家の死を悲しんだ妻や侍女が入水した池であった。通りかかった女性が影を映すと、水中に引き込まれ水中で死に至るという伝説の池である。

影に危害が加えられると命を落とすという話は、世界各地に存在する。フレイザー (James George Fraser) は、1890年から1936年に書いた『金枝編』(*The Golden Bough*) の中でそうした事例を数多く挙げている。例えば、ハイエナに影を踏まれると言語力を失い、女性の影が身にかかる痩せて死に至るなど、ほんの一例である。影が大きい、すなわち長いほど威力があるという信仰は、影の最も短いハイヌーン (high noon) への恐れに連なっていく⁽⁸⁾。

日本の「影踏み遊戯」は「影踏み鬼」とも呼ばれる。月夜で影のできる晩に、子供たちが集まり、皆が歌いながら囃す中を鬼役の子が他の子の影を踏むと鬼役が交替するという単純な遊びである。鬼ごっここの月夜版といったところである⁽⁹⁾。命を奪うことはないが、この遊びは古代の宗教的儀式から派生したという説がある⁽¹⁰⁾。

建築家の中には、影の重要性を強く認識している人がある。より正確には「光と影」の対比がもたらす美的感覚に関心をもっているのである。この場合、建築物は、単に部屋の配置や居住者の動線を考慮した居住空間であるばかりではなくて、美術的創造空間と化する。これに関しては、建築家奥村理絵の素晴らしい博士論文がある⁽¹¹⁾。

5. 影の分身感の存在に関する実験

事故などで身体の一部を失った人が、存在しないその部分にその後も痛みを感じるという話を聞く。マンプル・ファントーム、すなわち幻影肢 (membre fantôme) で、これは脳の認識作用によるものであると説明される⁽¹²⁾。

若干似たような現象で、人間は影に対して分身感をもつという実験が2003年になされている。実験は、イタリア北部のトレント大学 (Università degli Studi di Trento) とロンドンのロイヤル・ホロウェイ・カレッジ (Royal Holloway College in London) の研究者の合同研究によるものである⁽¹³⁾。

実験の概要は、こうである。被験者が机の上に突き出した手に閃光を当てると、被験者の脳は一定の反応を示す。今度は、突き出した手によって出来た影だけに閃光を当てると、脳はあたかも手自体に閃光を受けたときと同様の反応を示したのである。

この実験によって判明したことは、脳は影を自分の分身として知覚・理解しているということである、とウンベルト・カスティエッロ (Unberto Castiello) 博士は話している。彼によれば、影は人間にとって自分自身なのである⁽¹⁴⁾。

動物は影をどのように考えているのだろうか。

「月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する犬の心に、月は青白い幽霊のような不吉の謎である。犬は遠吠えをする。私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてみたい。影が、永久に私のあとを追ってこないやうに。」

これは、詩人萩原朔太郎の詩集の自序末尾中の文章である⁽¹⁵⁾。しかし、犬は、実際に自らの不気味な影に恐れて月に吠えるのであろうか。

さて、本筋に戻ろう。人間にとって、影は本当に現身 (うつせみ) のダブル (分身) なのか。これについて、幾つかの思考上ないしは想像上の事例を見ていくことにしよう。

6. 影と魂の等価性=シャミッソ著『ペーテル・シュレミールの不思議な物語』

仮に影が分身だとしても、影自体は3次元ではなくあくまで2次元の存在である。したがって、もし影が分身だとすれば、それは魂あるいは靈魂ということになる。

事実、「影」はギリシャ語ではσκιαで、これは「魂」という意味も合わせ持っているのである。同様に、ラテン語のumbraも影と亡霊を示していた⁽¹⁶⁾。

地中海世界から北に移っても事情は、大体同様である。北欧神話に出てくる女神にスカージ(Skaði)がいる。彼女は狩りの女神であるが、ゴート語の「影」および「闇」を意味するskadusに由来するところから、「闇」「死の女神」でもあった。古英語ではsceduで、「影、暗黒」を意味した⁽¹⁷⁾。

影は、異常な行動をする。俗に「影を売った男」で知られるのは、シャミッソの1816年の作『ペーテル・シュレミールの不思議な物語』である。この奇妙な話を書いた背景には、貴族の身でありながら、フランス革命によってドイツへの亡命を余儀なくされたシャミッソ自身の複雑な心理状態があるのかも知れない。

この物語は、余りにも有名で多くの人が知っている。内容は、こうである⁽¹⁸⁾。いつも金に困っている青年のペーテル・シュレミールは、あるパーティーで奇妙な男に会った。この男は、金を生み出す財布を所有していた。男は、もし影を売ってくれたら財布を渡そうと提案した。ペーテルは、取引に応じた。

影を失ったペーテルは、皆から非難を受け、恋仲になった女性からも影がないことを理由に結婚を拒絶された。1年が過ぎ、再会を約束していた奇妙な男が現われた。彼は、ペーテルに影を返してやってもいいが、死後に魂を譲り渡すことを求めた。

奇妙な男は、実は悪魔だった。そのことが分かったペーテルは、悪魔の申し出を断固拒否し、物欲を捨てて放浪の旅へと去っていった。ある時手に入れた古靴は、1歩で7里も進める特殊な靴であった。ペーテルは、その靴を履いて世界中を旅し、

動植物の研究者として生きていった。

この小説の主眼は、影を手放すことがアイデンティティーの破壊と喪失に連なるという点に置かれているということである⁽¹⁹⁾。しかし、それだけではない。悪魔が影を返すから死後の魂をよこせと迫っていることから分かるように、影は魂と同価値である、との指摘も認められているのである。

7. 影の分離・独立化=アナセン著『影法師』

影が人間から分離し、人間を死に迫りやる様相を描いたものに、デンマークのアナセン(H. C. Andersen, 1805-1875)の『影法師』(Skyggen, 1847)がある⁽²⁰⁾。Andersenは、デンマーク語ではアンデルセンではなくアナセンと発音する。

物語の主人公は、真・善・美(det Sande og de Gode og det Skjønne)を研究している北国から来た若い学者で、太陽が肌を黒く焦がす南の国に滞在している。夜になると、涼風が吹き町は生気を取り戻す。

学者は、借りている部屋に面する道の反対に位置するバルコニーのある部屋が気になってしかたがない。花が咲き、音楽が奏でられ、若い女性の姿も目にした。学者は、自ら訪ねていく勇気がないので、自分の影に訪問するよう頼み、必ず戻るよう念を押して送り出した。

翌日、コーヒーを飲み外に出た学者は、自分に影がないことに気付いた。影は、帰ってこなかったのである。しかし、残っていたに違いない影の根元が徐々に大きくなり、3週間後に帰国の途についたときには、通常の影の大きさになっていた。

帰国して数年後、飾り立てた立派な服装で学者の前に現われた影法師は、暑い町で向かいの家に居たのは「世の中で最も素晴らしいもの、詩だった」(det var den deiligaste af Alle, det var Poesien!)と告げる。そして、これからは自分を「きみ」ではなく、「あなた」と呼ぶよう求めた。学者は、それを快く受け入れた。

今や人間となった影法師は、「誰もが知ってはならないが、全ての人が知りたがっていること、〈隣人の悪〉」(hvad ingen Mennesker maatte vide, men

hvad de Allesammen saa gjerne vilde vide, Ondt hos Naboen) を見たといって去って行った。

何年か経ち、再び影法師が姿を現した。真・善・美の本が売れず、病気になっていた学者に、影法師は療養温泉地に行くことを提案した。しかし、条件があった。旅費は影法師が負担し主人となることであった。ここで学者と影法師との地位は、逆転した。

温泉地で、影法師は、物事が見えすぎるという病を治癒するために来ていた美しい王女と知り合った。王女は、影法師の病が影を持たないことであると見抜いた。影法師は、自由に動き特別に有能で多くの知識を身につけた影をもっているといい、学者を指差した。そして、それを証明するために、王女に難問を出してもらった。学者は、全ての難問に答えた。王女は、賢い影をもっている影法師と結婚することに決め、一緒に帰国した。

影法師は、学者に自分の影として振舞い、皆の前で床に横たわるなら王宮に住み高給を与えると提案した。学者は、それは王女と人々を欺くことになるとして断固反対し、監獄に幽閉された。

王女と影法師との結婚式が執り行われ、祝砲で人々は喜びに浸っていた。だが、学者はそれを知る由もなかった。彼は、すでに殺されていたからである。

アナセンの『影法師』は、影の分離・独立であると同時に、私市保彦が言うように、影の反逆を描いたものである⁽²¹⁾。

8. 『影のない女』(Die Frau ohne Schatten)

2世紀頃に生きたギリシャの地理学者パウサニアス(Παυσανίας)は、古代の聖地について書いた『ギリシャ記』(Ελλάδος Περιηγησις)の中で、ゼウスの神殿の中では影は存在しなかったと書いている⁽²²⁾。現代の、初めから影のない人間は、オペラの中に存在する。

オペラ『影のない女』は、ホフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal, 1874-1929)の台本にリヒャルト・シュトラウス(1864-1949)が作曲したものである。ホフマンスタールには、『ナクソス

島のアドリアネ』(Adriane auf Naxos),『薔薇の騎士』(Rosenkavalier)などの作品もある⁽²³⁾。

オペラ自体は、全3幕構成3時間を越える大作で、大筋は次の通りである⁽²⁴⁾。東洋のある皇帝が、赤い鷹に追われていた羚羊を捕まえると美女に変身した。実は、この美女は霊界の大王が人間との間で産ませたもので、変身能力をもっていたのである。皇帝は、美女を妃とした。

不思議なことに、妃には影がなかった。そして、妃は3日の間に影を得なければ不妊の身となり霊界に戻らなければならず、皇帝は石と化する運命にあった。

行動を起こした妃は、貧しい染物屋の妻を魔法でたぶらかし、影を手に入れようと策を弄する。しかし、思い止まった。他人を影なしの不幸な身に置いてまで自分の幸せを求めることは正しくないと感じたからである。

妃は霊界の大王の元に赴き、他人の不幸の上に自らの幸福を築くことはできない、と訴えた。大王の再度の説得をも、妃は拒んだ。すると、石にされた皇帝が現われた。妃は、それを見て自分も命を断とうとした。その時、奇跡が起こった。妃が自分だけの幸せを追求せず、他人を思いやる心が奇跡を起こしたのである。妃には影が生じ、皇帝は石から元の人間へと変身した。どこからともなく子供たちの歌声が聞こえてくる。オペラは、ここで終わりを迎える。

上演時間が長いことも加わって、『影のない女』は、かなり難解なオペラであるが、種類としては、「寓話オペラ」に分類することができる。寓話性の度合いは物語の展開と舞台が多様なので、その分だけ強くなっている。主要登場人物とその生きる世界も、霊界に存在する大王、人間界の皇帝、人間界にいるが元来は霊界の身である妃、といった具合に異なっており、これに重要な脇役が絡んでいるので非常に見応えがある。見終わると一息吐くといった感じを持つのは私だけではないであろう。

ストーリーの中に折り込まれている寓話的エレメントは、影がないと不妊であるという点と他人への愛と心遣い、すなわち利他心が影を与えたということである。このオペラには、ストイキツァ

(Victori Stoichita) がいうように、「人間の影のなかに魂の存在を認め、人間の魂のなかに影のそれを認める」潜在意識的伝統⁽²⁵⁾が存在しているのかも知れない。

9. 「元型」(archetype) の共通性問題

分析心理学者のユングは、人間の心を意識層と無意識層に分けている。影は、無意識層に属する問題である。ここでいう影は、光源によってできる通常の影ではなく心理学上の概念である。彼によれば、「影」、すなわち「シャドー」(shadow) とは人間の自律した世界、自己内在性である⁽²⁶⁾。

ユング派に属する教育分析学者ホリス (James Hollis) によれば、影とは、自分自身を困惑させる傾向を持つ自分自身のあらゆる側面を示す概念である⁽²⁷⁾。人はその存在に気付いている場合もある、そうでない場合もある。

無意識は、さらに個人的無意識と集合的無意識に分けられる。個人的無意識とは、個人の中で忘却してしまった記憶の他、性欲、欲望のように意識によって抑制、抑圧されたものである。これに対して、集合的無意識 (普遍的無意識) は人類に共通しているものであり、伝承・伝説や神話などの中に共通しているものとされる。

ユングは、個人の妄想や幻覚が神話等の内容と類似しているとし、集合的無意識の存在を仮定し、その内容として「元型」(archetype) の概念を提示した⁽²⁸⁾。アーキタイプの arche は、根源を意味するギリシャ語の *αρχη* に由来するものである。この元型の中の重要な1つが、「影」である。

自己内在である影は、どのように作用するのだろうか。ホリスは、影の動き、現われ方を4つに分類している⁽²⁹⁾。第1は、影が無意識に留まる状態である。第2は、影が投影され、否認される場合である。第3は、影に憑依される場合である。第4は、影を意識に統合する場合である。これらの詳細な内容は専門性が高いので、分析心理学に関する知識と理解とが要求される。

ところで、日本では、ユング心理学はまるで金科玉条のような扱いをされている感がする。しかし、ユングの説にはどうしても納得できないところ

がある。ユングはスイス人で、父親はキリスト教の牧師である。したがって、彼の思考の根底をキリスト教文化が支配しているのは当然である。もっとも、これ自体は、批判の対象にすべき事項ではない。

問題は、「集合的無意識」の概念である。ユングは、集合的無意識が人類共通だという。しかし、これは、あくまで仮説である。例えば、日本文化は非キリスト教文化の国である。事物の象徴性が民族によって変わるのは当然である。「神」の概念だって、同じではない。

日本は、あらゆる事物、自然現象に神性あるいは靈性を認めるアニミズムの文化圏に属する。一神教のキリスト教とは全く違う。

ユングの言う伝承や神話も、太陽信仰もあればかつてのケルト民族の月信仰もある。世界各地、各文化圏の「集合的無意識」がキリスト教のヨーロッパにおけると全く同じでないのは、当然である。言うまでもなく、一神教が「汎心論」(panpsychism) や「多神教」(pantheism) より優れているという理由は全くない。

このように考えると、ユング流の精神分析には大きな限界があると言わざるを得ないのである⁽³⁰⁾。ただ、それがどのような形であれ、ユングが指摘したように人間の心の中に「影」があるのは、否定し得ない事実である。

10. 終わりに—影との「シンパシー」—

Ombra mai fu という歌がある。ヘンデルのオペラ『セルセ』(Serse) 中のアリアである。キャスリーン・バトラー (Kathleen Buttler) が惚れ惚れする美声で唄っている。その出だしは、次のようである。

Ombra mai fu di vegetabile cara ed amabile soave piu. (かつてこのように親しく愛すべき美しい木陰があったらどうか)⁽³¹⁾。

心休まる木陰は、樹木の影である。樹木にも、心があるのだろうか。ドロシー・マクレーン (Dorothy MacMaclean) は、次のように書いている。

「自然の中に存在する「高次の知的エネルギー」、

または天使、ディーバ（サンスクリット語で「輝くもの」という意味の言葉）は、様々な形の元型（型紙のようなもの）を持ち、元素として知られているエネルギー（土、空気、火、水の4大元素）は物理的な形を作り出すプロセスを扱っているということに、私は気づきました⁽³²⁾。

ジャック・ブロス (Jacques Brosse) は、*Mythologie des arbres* 中の第6章「聖なる森と樹木の魂」で、「古代においては、傑出し超自然的なしるしによって注目された樹木のみが、崇拝の対象となっていた。とはいうものの、樹木はすべてそれなりにその本質に対応した魂を所有していたのだ⁽³³⁾」としている。なぜかこの文章は、「魂を所有していた」と過去形になっている。その理由は不明である。しかし、樹木は、生命体として過去においても、また現在においても魂をもっていると考えたい。

樹木の魂は、木霊（こだま）すなわち木魂である。木魂の存在は樹木崇拝と関係しており、世界の各地域に見ることができる⁽³⁴⁾。私たちが森や樹木に親しみと癒しを感じるのは、木魂とのシンパシー（心の共鳴）があるからに違いない⁽³⁵⁾。そして、木陰は、樹木の *pars pro toto*、すなわち「全体に代わるその一部分」である。

私たち人間のもつ影も、多様な種類と様相、様々な発現形態をもっているにしろ、人間の *pars pro toto* に他ならないのではないかという気がする。自分自身の影とのシンパシーを伴った対処の仕方の追求は、生きている限り永遠に続く課題である。

註

- (1) 佐野数定（監修）：『平凡の歌本 日本のヒット歌謡1000曲集』（非売品），平凡出版，1975年，p.62.
- (2) 由井龍三：『懐メロ 心の風景』，春秋社，2005年，pp.55-56. これに対して，二木紘三は，手痛い失恋を味わった古賀が自殺を思い止まった後に，創ったものであるとしている（duarbo. air-nifty.com/songs/2007/071/post-469a.ht 最終確認 2013.7.10）
- (3) 丸山圭三郎：『生の円環運動』，紀国屋書店，1992年，p.164. 丸山は，「私たちは，存在しないものまでも想像し，まぶたの裏に人のおもかげを描く動物である。古来日本の文化が〈影〉の文化であったばかりか，実は人間の文化そのものが光と影を分けることのできない〈影〉なのではないだろうか」と問題提起をしている。
- (4) 河合隼雄：『影の現象学』，講談社，2008年，p.36.
- (5) 「洞窟のアレゴリー」に関しては，Kernan, Alvin: *In Plato's Cave*. Yale Univ. Press, 1999.
- (6) 言葉は，それを用いる人によって内包が異なってくる。思考の基礎が観念実在論であったプラトンは，エイドス (εἶδος) とイデア (ἰδέα) をほとんど同じ意味で使っていた。現実の事象の世界は仮想の世界であり，本当の世界はエイドス，イデアであると考えた。これに対して，弟子のアリストテレスは，エイドスとアデアを分離して考察するようになっていった。語源的には，エイドスとイデアは，イデイン (ἰδεῖν) に由来し，5感によって感知される物事の外見や様式などを意味するものであった。
- (7) 影取りの池伝説については，萩坂昇：『かながわの伝説散歩』，暁印書館，1998年。
- (8) フレイザーの訳本は，『金枝編』（永橋卓介訳），岩波書店，2002年。
- (9) 笹間良彦：『日本こどものあそび大図鑑』，遊子館，2005年，p.50.
- (10) 河合隼雄：前掲，2008年，p.18.
- (11) 非常に参考になるものに，奥村里絵：『影を詠む＝Shadow oriented architecture（東京芸術大学博士論文（博美69号，平成11年）がある。
- (12) 幻影肢に関する最初の報告は，16世紀の医師アンブロワーズ・パレ（Ambroise Pare）によってなされている。これについては，Kolb, Laurence: “Disturbances of the body-image”. *American Handbook of Psychiatry*, Vol.4, 1975, pp.810-830. さらに，広瀬浩司：「身体の幻影と道具の生成－メルロ＝ポンティの幻影肢論の射程－」（<http://www.asahi-net.or.jp/dq3k-hrs/documents/phantom.pdf>），p.33（最終確

- 認 15-7-2013)
- (13) BBC NEWS (電子版), 15-12-2003. (<http://news.bbc.co.uk/2/hi/health/3313959.stm> 最終確認 14-7-2013)
- (14) Op. cit., BBC NEWS.
- (15) 萩原朔太郎:『月に吠える』, 角川書店, 1991年。
- (16) ちなみに, 古代エジプト人も人影は霊の一種であると信じていたと言われる。(<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/antiGM/shadow.html>. 最終確認 10-8-2013)。
- (17) Turvill-Petre, E. O. G.: *Myth and Religion of the North*. Greenwood, 1964, p.164. なお, 水野智明:『生と死の北欧神話』, 松柏社, 2005年, pp.213, 282. も参考。
- (18) 邦訳は, 池内紀訳:『影をなくした男』, 岩波書店, 1985年による。
- (19) 私市保彦:『幻想物語の文法』, 筑摩書房, 1997年, pp.67-68.
- (20) デンマーク語原文は, Det Kongelige Bibliotek: *H. C. Andersen: Eventyr 37: Skyggen*. (1847) による。文字は, 当時の綴りである。
- (21) 私市保彦:前掲, 1997年, p.74.
- (22) これについては, 飯尾都人:『ギリシャ記』, 龍溪書舎, 1991年がある。
- (23) ピーター・コンラッド:『オペラを読むーロマン派オペラと文学形式』(富士川善之訳), 白水社, 2003年。
- (24) *Die Frau ohne Schatten* (DVD), コロンビア・ミュージック・エンターテインメント, 2010年による。
- (25) ストイキツァ, ヴィクトル・I.:『影の歴史』(岡田温司, 西田兼共訳), 平凡社, 2008年, p.204.
- (26) 河合隼雄:前掲, 2008年, pp.40-41.
- (27) ホリス, ジェイムズ:『「影」心理学』(神谷正光, 青木聡共訳), コスモス・ライブラリー, 2009年, pp.x, 11.
- (28) ユングの説は, 日本では学問的に確立されたものだとして理解されることが多いようである。しかし, 仮説を多く含むものだとしたほうがいいようである。もっとも, ユングに限らず,
- 学説の多くにはさらなる立証可能性を残していることが多いのも事実ではある。ちなみに, 欧米の書店では, ユングの著書はオカルト分野に分類されていることが結構ある。
- (29) ホリス, ジェイムズ:前掲, 2009年, pp.12-28.
- (30) ユング批判については, ノル・リチャード:『ユング批判の新たな地平をひらく』(原題 *Jung Cult*. 月森左知, 高田有原共訳), 創土社, 2011年。今村一成:「ベンヤミン『パサージュ論』におけるユング批判について」, *Memoirs of Osaka Institute of Technology*, series B, Vol.51, No.2 (2006), pp.33-45. などがある。
- (31) Classic Kathreen Battle (CD) レーベル:キングレコード, 1987.
- (32) マクレーン・ドロシー:『樹木たちはこう語る』(原題: *Call of the Trees*, 山川紘矢, 山川亜希子共訳), 日本教文社, 2009年, pp.26-27.
- (33) ブロス・ジャック:『世界樹木神話』(原題: *Mythologie des arbres*, (藤川史郎, 藤田尊潮, 善本孝共訳), 八坂書房, 2008年, p.262.
- (34) 樹木崇拝については, Altman, Nathaniel: *Sacred Trees*. Sierra Club Book, 1994.
- (35) 樹木と人間とのシンパシーについて, 素晴らしい幻想的無韻詩に, Palance, Jack: *The Forest of Love. A Love Story in Blank Verse*. Summerhouse Press, 1996がある。著者のジャック・パランスは俳優で, 古典的西部劇『シェーン』で凄味のあるガンスリンガーを演じ, 『シティー・スリッカーズ』で, アカデミー・助演男優賞を受賞した。この無韻詩については, 石渡利康:「Jack Palance: *The Forest of Love. A Love Story in Blank Verse*」に見る「人樹共生」思想, 国際関係研究, 第30巻2号, 平成22年, pp.117-124.
- * ギリシャ文字の表記に関しては, 周知のようにアクセント記号が存在するが, 本稿では印刷所の都合上これを全て省いた。単語によってアクセント記号を付けることが可能なものもあるが, そうすると不統一が生じるのでそうしたのである。本当は不完全でよくないこ

とである。しかし、例えば、定評のある独習書Teach yourselfシリーズのGreeceのように、はじめからアクセント記号を省いているものもある。これは、学習を容易にするためだという。

(2013.9.5)